

東京都スクールカウンセラー（臨床心理士）

金屋光彦

物語を紡ぐ人は、誰？

— 子どもたちの自己肯定感を考える その2 —

1 プロローグ

「ぼくたちは、なぜ学校へ行き、なぜ勉強する必要があるのですか？」そう子どもたちに聞かれたら、みなさんはどうこたえるのだろうか…？

四半世紀以上携わってきた思春期支援を振り返るに、未だ思春期は謎の多い季節である。私たちは誰もがみな自分の人生をひたむきに生き、自分の物語を日々紡いでいる。その物語が本格的に始まるのは、思春期からだ。自我に目覚め、己モードの魂がくっきりと宿る頃から、本当のライフストーリーが、独自の命を吹き込まれてスタートするのである。

その物語の調べを奏でる者は、もちろん私たち自身。だが、自分の物語なのに、誰かほかの人が織り成すのだったら、一体どんなことが起きるのだろうか？

2 破綻した思春期

それは、今から10年前の2008年7月、暑い夏の夜更けに起こった。川口市に住む私立中学3年生のA子（当時15歳）が、就寝中の父親（同46歳）を包丁で刺し、死亡させたのである。

A子の家族は、父と母（同49歳）と、小学6年の弟（同12歳）の4人家族。その日A子は英会話の補習を無断欠席し、家にいた。製菓会社勤めの父親は休暇日で、弟と3人でスーパーへ出かけ食材を購入する。そして、父と2人でチキンカレーを作るのである。そこへ仕事から帰った母親が合流し、4人仲良く夕食を食べた。そうして事前に録画していた番組を一緒にリビングで観た後、それぞれの部屋へひきあげたという。絵にかいたような一家団らん。だが、それからわずか数時間後に、悲劇が起るのである。

「その日のA子に変わった様子はなかった」と母親は語る。「家族仲は一般の家庭と変わらず、良かったと思う。娘は悩みを話すことはなく、動機に思い当たることはない」とも述べている。

また、同じマンションの住民は「夫婦仲も悪くなく、家族で買い物によく出かけていた。A子ちゃんと弟がキャッチボールをする姿も時折見かけた」とA子の家族に対する周囲の評判は、良いものばかり。また、彼女自身についても、小学校時代の同級生がこう証言する。

「物静かで誰にでも親切な子。人に怒ることを見たことがない。まさかの思いでいっぱいです」。また同じ私立校の女子生徒も「おとなしくて人当たりの良い子でした。みんな何でこんなことになったのかわからない、と言ってます」

家族の評判もA子の評判もすこぶる良かった家庭での破綻事件、なぜこんなことが起こったのだろうか…？その解くカギの一つが、「娘は悩みを話すことはなく、動

機に思い当たることはない」と母親が語ったところにある。

3 事件の真相

殺人未遂容疑で逮捕されたA子は、こう供述する。

「父親とは普段から会話はなかった。両親から勉強しろと言われ、うっとうしい思いと反感があった。勉強は好きではなかった」。

私立中学受験を迎えた小学6年生当時、塾の成績が落ちた際、父親に厳しく叱責された。事件後母親は、勉強や生活にうさかったのは、父親よりむしろ私と自分を責めていたという。

製菓会社に勤める父親の影響からか、中2まで「夢は薬剤師」と語っていたというA子。3年生になって成績が落ち、この時も両親から厳しく叱責されていたという。犯行当日は保護者会があり、悪かった期末試験の成績を、親に知られてしまう怖れもあったようだ。

「数週間前から何もかも嫌になって、すべてを終わりにしたいと考えていた。人間関係につかれた」とも語っている。こういったA子の揺れ動く傷ついた心に、両親は全く気づいていなかったのではないかと、思う。

4 誰もが物語を紡ぐ主人公に～

わが子の成績が、優秀であってほしいという親の願望は、よくあるものだ。

だが、日々A子の両親は、彼女を見ていたのではなく、成績ばかりを見ていたのではないかと、もっと言えば、親の願望に彩られた良い子の姿を、A子の中に探し求めているのではないかと。それが見えている間は、A子を受け容れることができたのだろう。それは、A子自身を愛していたというより、自らの願望を愛していたにすぎない。

子どもは自分を産み育ててくれた両親から、愛されたいと心から願っている。どんなに虐待されても親を悪くは言わず、親を喜ばせようと期待に沿う行動を優先しようとする。だが、子どもも思春期に入る頃から、本格的に自分で自分の物語を紡いでいかねばならない。

親の意に沿わない成績不良も、子どもにとっては大切な人生だ。それは、いろいろなことを示唆し、何より子ども自身が心を痛めている。その痛みを一緒になって感じてあげるのが、親であり家族であるはずだ。成績良好のわが子しか受容できないのであれば、その子の人生は親の人生の断片にすぎず、子ども自身の物語は展開していかない。そこには自己肯定感が育つ土壌を見つけることさえ、難しいだろう。

A子が終わらせたかったのは、父親の命ではない。終わらせたかったのは、自分で自分の物語を紡ぐことを邪魔する、親の願望に支配された生き方だったといえるだろう。